

主 題： まことの光であることば

聖書箇所：ヨハネの福音書 1章6－13節

かつて20世紀に活躍したひとりの信仰者ディートリッヒ・ボンヘッファーという人物は、1906年にドイツで生まれました。当時、あのヒトラーが国内の政権を握る中、大きな悪の働きというものを覚えたボンヘッファーは、クリスチャンとしてどんな務めを果たすことができるのだろうかといつも思い悩んでいました。そんな彼が、後に始まった第二次世界大戦のさなかナチスの政策に抵抗するレジスタンス運動に参加することになります。そしてその結果、彼はユダヤ人がスイスに脱出するのを手助けしたという理由で逮捕されることになるのです。また、その後もヒトラーの暗殺計画に関与した容疑で逮捕されてしまいます。捕らえられたボンヘッファーは、2年にわたってさまざまな刑務所や強制収容所に監禁されることになりました。そして最後にはレジスタンスに参加したほかの数名のメンバーと一緒に処刑されることになるのです。彼の処刑はなんとナチス政権が崩壊するわずか4週間前の出来事でした。ボンヘッファーは収監されていた間、彼の親しい友人や家族に手紙を書いていました。そして、そのうちのひとつの手紙の中に、彼はレジスタンス運動に加わるという自分の決意を表明したものがありました。そこにはこのように記されていました。「たとえその運動が成功したとしても、もう二度と自分の人生はもとに戻ることはない」と。そのような覚悟が手紙にははっきりと記されていました。レジスタンス運動に参加するという彼の下した一つの決断は、文字どおり彼の人生全体に大きな影響を及ぼすことになったのです。

○まことのひかりの“現れ”と光に対する二つの“応答”

さて皆さん、自分のこととして少し考えてみてください。私たちの日々の生活の中で、いろいろな選択や決断を下すような場面があると思います。そしてその決断が及ぼす影響が大きければ大きいほど、私たちはひとつひとつの選択に慎重になろうとします。では、その一つの選択が、人生のすべてを左右する、いや、もっと言えば、この地上だけでなく永遠にまで影響を及ぼすとすれば、私たちはその決断にどれほど真剣に向き合わなければならないのでしょうか？きょう、みことばから一緒に考えていきたいのは、ひとりひとりの歩みに大きな影響をもたらすことになる大切な選択に関わることです。そして今回見ていくヨハネ1：6－13、この箇所から私たちは大きく二つの内容、まことの光の現れと、その光に対する二つの応答というものを見たいと思います。

ではいつものように、まずはみことばをお読みしますので、神様のことばによく耳を傾けてください。

ヨハネ1：1－13

「1 初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。：2 この方は、初めに神とともにおられた。：3 すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。：4 この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。：5 光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。：6 神から遣わされたヨハネという人が現れた。：7 この人はあかしのために来た。光についてあかしするためであり、すべての人が彼によって信じるためである。：8 彼は光ではなかった。ただ光についてあかしするために来たのである。：9 すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようとしていた。：10 この方はもともと世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。：11 この方はご自分のくにに来られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。：12 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。：13 この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。」

1. まことの光の現れ 6-9節

では早速、一つ目の内容から一緒に考えてみましょう。まことの光であるイエス様の現れについて、6-9節にこのように描かれていました。「:6 神から遣わされたヨハネという人が現れた。:7 この人はあかしのために来た。光についてあかしするためであり、すべての人が彼によって信じるためである。:8 彼は光ではなかった。ただ光についてあかしするために来たのである。:9 すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようとしていた。」と。さて、この箇所を読んだ時、最初不思議に感じた人もいるかもしれません。というのも、この福音書を記していたヨハネは、初めの1-5節を通して、人々の目をただイエス・キリストに向け続けていました。ヨハネは「初めに、ことばがあった」と始めていました。ヨハネは最初から、“ことば”であるイエス様がすべての初めからいつも存在し続けていた永遠の神様なのだということを、すべてを造った造り主であって、またいのちの源であり、人の光なのだということを明らかにしていたのです。この地上に人として来られたそのお方は、確かに偉大で唯一まことの神様でした。力と知恵と栄光とに満ちておられるそんなイエス様の姿こそ、私たち自身もどんな時も目を向けるべきものだったのです。1-5節にイエス様のすばらしい姿が描かれていました。その中心にいつもイエス様があったのです。

でも、その目線が6節で急に別のものに移っていました。ヨハネは突然6節でだれかを登場させていたのです。「神から遣わされたヨハネという人が現れた」と言われていました。ちなみに勘違いのないように言いますが、この「ヨハネという人」とは、著者のヨハネのことではありません。著者であるゼベダイの子の使徒ヨハネは、福音書を通して自分の名前を一度も用いずに、代わりに自分のことを「イエスが愛された弟子」と述べていました。ですから、この福音書の中で「ヨハネ」と実際の名前で表現されている場合は、バプテスマのヨハネのことを指していました。

いずれにしろ、偉大なイエス様の姿を冒頭から描いていた著者ヨハネが、ここで突然バプテスマのヨハネを持ち出す、そんな場面に出くわすのです。私はなぜだろうと思いました。なぜ偉大なイエス様についてもっと詳しく語っていかないのか、どうして急にヨハネという人物について触れたのでだろうと。果たしてヨハネはここで、イエス様からほかの者に読者の焦点を移そうとしていたのでしょうか？そうではありませんでした。ここで焦点が変わったのではありません。話の中心が、登場してきたバプテスマのヨハネに移ったのでもありません。そうではなく、著者はただこの箇所ですばらしい人物を通して、さらに偉大な存在に目を向けさせようとしていたに過ぎなかったのです。神様から遣わされたバプテスマのヨハネを通して、それよりもさらに偉大なイエス・キリストの姿に、人々の心を留めさせようとしていました。

▶「バプテスマのヨハネ」

でも、これだけ聞いてもよくわからないと思うかもしれません。そのことを正しく理解するのに、少し時間を取って、改めてバプテスマのヨハネという人物がどんな存在だったか一緒に考えてみましょう。バプテスマのヨハネと聞くと、どんなイメージを浮かべるでしょうか？少し変わっているような野蛮な人を思い浮かべるでしょうか？確かにヨハネというのはほとんど荒野で過ごし、らくだの毛で織った物を着て、そして腰に皮の帯を締め、いなごと野蜜を食べているような人物でした（マタイ3:4）。野蛮な人なのかと思っているかもしれません。また、もしくは、信仰のゆえにひどい苦しみを味わった人だと思ひ浮かべる人もいるかもしれません。確かにヨハネは真理を決して曲げることなく、最後にはヘロデ王様によって首をはねられた人でもありました。今、皆さんの頭の中にいろいろな姿が思い浮かんでいるでしょう。でも、ここで何よりも覚えていてほしいのは、バプテスマのヨハネという人物は、人々の間で長い間待ち望まれていたひとりの預言者だったということです。

ヨハネは神様のことばを人々に宣べ伝える約束されていた神様からの使者でした。神様から遣わされたあかし人だったのです。旧約聖書で最後に記されたマラキ書3章の中で、神様はイスラエルの民にこんな約束を与えていました。3:1に「見よ。わたしは、わたしの使者を遣わす。彼はわたしの前に道を整え

る。あなたがたが尋ね求めている主が、突然、その神殿に来る。あなたがたが望んでいる契約の使者が、見よ、来ている」と万軍の【主】は仰せられる。」とありました。神様は最初に、「道を整える」、そんな「わたしの使者を遣わす」という約束をお与えになりました。また、マラキ4：5－6——これは正真正銘、旧約聖書の最後に書かれた書の最後のことば、最後の2節ですが、そこでこんなふうに言われるのです。「:5 見よ。わたしは、【主】の大いなる恐ろしい日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。:6 彼は、父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。それは、わたしが来て、のろいでこの地を打ち滅ぼさないためだ。」と。さて、文字どおりこれが神様からの最後のことばでした。このことばが与えられてから、実に400年もの間、イスラエルの民は神様から新たなことばを聞くことはなかったのです。彼らの立場に立って考えてみると、誕生してからこの時に至るまで、預言者を通して神様のことばを聞き続けてきたのがイスラエルの民でした。そしてそんな彼らに対して、神様は400年間語ることをやめたのです。当たり前ですが、400年はとても長いです。日本の歴史で400年前に起こった出来事を覚えていますか？例えば徳川家康が征夷大将軍になって江戸に幕府を開いたり、大阪夏の陣で豊臣家が滅んだり、また、第一次鎖国令が出されたりした時期でした。400年というのはそれほど長い期間でした。それほどまでに長い空白の、沈黙の期間があったのです。ひとりの使者が与えられるという神様の最後の約束のことばを耳にしたイスラエルの民たちは、それ以降何も聞くことはありませんでした。何の音沙汰もなかったのです。神様からのことばを聞くのが日常だったその人たちは、いったい神様はどこにおられるのだろうか、いったい神様の約束はどうなってしまったのだろうかと思っていたことでしょう。イスラエルの民たちは、長い間待ち続けていました。

そして、そんな彼らのもとに現れたのがバプテスマのヨハネだったのです。ルカ1：13－17を見ていただくと、ここにマラキ書で言われていた約束の成就を見て取ることができます。「:13 御使いは彼に言った。「こわがることはない。ザカリヤ。あなたの願いが聞かれたのです。あなたの妻エリサベツは男の子を産みます。名をヨハネとつけなさい。:14 その子はあなたにとって喜びとなり楽しみとなり、多くの人もその誕生を喜びます。:15 彼は主の御前にすぐれた者となるからです。彼は、ぶどう酒も強い酒も飲まず、まだ母の胎内にあるときから聖霊に満たされ、:16 そしてイスラエルの多くの子らを、彼らの神である主に立ち返らせます。:17 彼こそ、エリヤの霊と力で主の前ぶれをし、父たちの心を子どもたちに向けさせ、逆らう者を義人の心に立ち戻らせ、こうして、整えられた民を主のために用意するのです。」とあります。400年前に約束されたこと、400年の空白の期間を経て登場した約束の人物、それがバプテスマのヨハネによって成就していました。彼こそ神様から遣わされた預言者、人々の間で神様のことばを宣べ伝える教師だったのです。

▶「あかしするため」

そして何よりも、そんな彼には重大な役割が与えられていました。彼は一つの大切な役割、務めを担っていたのです。そのことについて、私たちのきょうのテキストが教えてくれています。ヨハネ1：7－8を見てください。「:7 この人はあかしのために来た。光についてあかしするためであり、すべての人が彼によって信じるためである。:8 彼は光ではなかった。ただ光についてあかしするために来たのである。」と書いています。何の目的のために、何の務めのためにバプテスマのヨハネは登場したのでしょうか？それはただ「あかし」のためでした。ここで何度も使われていたこの「あかしする」ということばには、「証言する」とか「証人となる」といった意味が含まれています。そして最も基本的な用法として、これは裁判所の法廷における証人を表していました。裁判所にあつて、だれかの証言をするために呼ばれたその人物の姿を想像してみてください。その人は当然、そこで自分勝手な憶測を語るのではありません。その場で、感情に任せて自分勝手な考えや思いを話すのでもありません。その場にあつて、確かな事実を口にするのです。当の本人に代わって、その人のことを何事も隠さずに真実だけ、事実だけを述べるのです。それが証人と言われるものの存在、務めでした。そして、バプテスマのヨハネの役割は、まさにそれだったと言うのです。バプテスマのヨハネは、自分の何かを明らかにするために来たのではありませんでした。彼自身は光で

はありませんでした。彼は後にやって来るまことの光であるイエス様が、いったいだれなのかということ、どれほどすぐれたお方なのかということ、人々の間でただあかしするために現れた人物だったのです。

そして、そんなバプテスマのヨハネこそ、神様ご自身が用意されていた最高の先駆者でした。イエス様が来られるその前に現れて、イエス様の道を整えて、そしてイエス様の姿を人々の前で明らかにするのに最もすぐれていたあかし人でした。これほどの適任者はほかにだれもいませんでした。なぜかという、先ほど文脈を見ましたけれども、ヨハネが登場してくるまで、イスラエルの民たちは400年の間、いったい神様はどこにおられるのだろうか、いったい神様の約束はどうなったのだろうかと思いつづけていたのです。そして、そんな人々のところに約束されていたヨハネが現れたのです。人々は間違いなく彼のもとにわんさかやって来たことでしょう。いや、実際にその時の様子がみことばの中にこんなふう描かれていました。マルコ1:4-5に「:4 バプテスマのヨハネが荒野に現れて、罪の赦しのための悔い改めのバプテスマを宣べ伝えた。:5 そこでユダヤ全国の人々とエルサレムの全住民が彼のところへ行き、自分の罪を告白して、ヨルダン川で彼からバプテスマを受けていた。」と書いています。ひとり、ふたりの話ではありませんでした。数十人の話でもありませんでした。「ユダヤ全国の人々とエルサレムの全住民」とが彼のもとに行って、自分の罪を告白し、バプテスマを受けていたのです。余りにも多くの人々が彼のもとに毎日、毎日集って、彼から話を聞き続けていたのです。では彼はいったいどんな話をしていたのでしょうか？ヨハネは自分のことを話していたと思います？そうではありませんでした。ヨハネはただひとりまことの光である、そのお方について語り続けていたのです。イエス様についてあかしし続けていました。真っ暗やみの中であって、罪にさまよっている者たちに、真理の道を照らし、救いを与えることのできる光について、必ずやみに打ち勝たれる希望である光について、そんなまことの光であるイエス様について、ヨハネがし続けていたことは、すべての人たちの心をそこに向けさせることでした。それがバプテスマのヨハネの働きだったのです。

でも忘れてほしくないのは、彼自身もすごい人物のひとりだったことです。後にイエス様もこんなことばを彼に関して残したのです。マタイ11:11に「まことに、あなたがたに告げます。女から生まれた者の中で、バプテスマのヨハネよりすぐれた人は出ませんでした。」とあります。バプテスマのヨハネは彼自身すごい人物でした。でも彼は自分の役割をわかっていました。そして自分の役割をわかっていた彼は、光であるイエス・キリストを信じる者には救いがあるということを知っていた彼は、人々の前であかしし続けたのです。「皆さん、私じゃありません。私よりもさらに力のある方が後から来ます。罪から救うことができる、永遠のいのちをもたらすことのできる、そんなすごい救い主が後から来ます。だから皆さんまことの光であるイエス・キリストに目を向けてください」と。ですから、バプテスマのヨハネのあかしを見て、このヨハネの福音書を考えると、著者ヨハネは決してイエス・キリストから焦点を移していたわけではありませんでした。ヨハネはただバプテスマのヨハネを持ち出すことによって、角度を変えてイエス様こそまことの光として現れた、私たちが焦点を置かなければならない存在なのだということ、明らかにしていたのです。偉大なバプテスマのヨハネは、たださらに偉大な主の主をあかしする目的のために来た人物だったのです。

さて、ここで少し立ち止まって考えてみましょう。今、ヨハネの姿を見ました。果たして私たちはイエス様のことを同じように見ているのでしょうか？ヨハネが見ていたように、ヨハネが覚えていたように、イエス様の姿を正しく覚えているのでしょうか？イエス様こそすべてにまさって偉大なお方であって、この方の前に自分自身は何でもないということ、私たちはいつも覚え続けているのでしょうか？そして偉大なお方であるイエス様のことをただ覚えているだけではありません。その方のことを私たちはいつもあかししようとし続けているのでしょうか？それともまことの光であるその方を、いつの間にか横にやって、自分自身に焦点を置いていたりしないのでしょうか？ここに登場してきたバプテスマのヨハネが、仮

に人々の目を自分に向けさせようとするれば、それは幾らでもできたでしょう。彼は400年にわたる沈黙を破って現れた神様から遣わされた使者だったのです。実際、多くの人たちが彼のもとに集まって来ていました。そんな自分の特別な立場というものを誇りにして、人々からちやほやされていることをうれしく思い、人々の関心や興味をキリストではなく、自分に向けさせようとするれば、それは容易にできたでしょう。でも、彼はそういったことをいっさいしなかったのです。いや、むしろ彼は繰り返し何度も口にし続けていました。ヨハネ1：27を見ると、バプテスマのヨハネは「その方は私のあとから来られる方で、私はその方のくつひもを解く値うちもありません。」と言いました。これだけではありません。ヨハネ3：30に「あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。」とありました。

ヨハネのあかしというのは変わっていませんでした。バプテスマのヨハネは、自分自身に与えられていた務めを正しく理解していただけではありません。彼はイエス様がいったいだれなのかということ、イエス様がいったいどれほどすぐれたお方なのかということと正しく覚え続けていました。イエス様だけが愛する主、そのお方だけが永遠のいのちをこの世にもたらすことのできる希望なのだということ、唯一の救い主なのだということをおぼろげに覚えていることにはありませんでした。そして自分よりもはるかに偉大なその主の姿を覚え続けていたからこそ、ヨハネはどんな時もへりくだって、すべてのことをただイエス様だけに焦点が当たるようになし続けていました。

私たちがへりくだろうとする時、私はへりくだらないといけない、私は謙遜な者にならないといけないと、ただ自分自身に言い聞かせているだけかもしれません。でもそれではどうにもなりません。私たちにとって鍵は、私たちよりも遥かに偉大なお方を覚え続けることです。そして、そのお方が自分自身のことさえ用いてくださるということを知るのであれば、私たちは誇りではなく、この方の前にへりくだって感謝を持って歩んでいこうとするのです。そして、私たちがいつも覚えなければいけないことは、ヨハネがこれほどまでに自分を犠牲にしてあかしし続けていたイエス様こそ、今の私たちも同じようにあかしすることのできる、同じように希望を見続けることのできる偉大なお方だということなのです。果たして私たちはこの主の姿をいつも心に留めて、どんなものよりもこの主を愛して歩んでいこうとしているのでしょうか？この主の偉大さを覚えているのでしょうか？それともその主を忘れてしまって、その主を本来あるべきその地位に置かないで、立場に置かないで、それとは別に自分を、もしくはそれ以外の何かと取り替えてしまっていないのでしょうか？バプテスマのヨハネは光ではありませんでした。ただ、光についてあかしするために遣わされた存在でした。そして、そんな彼があかしし続けていた偉大な存在、それこそすべての人を照らす、まことの光として現れたイエス・キリストだったのです。

2. まことの光に対する二つの応答 10-13節

すばらしいお方の現われについてヨハネは触れました。そして、そのようなまことの光が、偉大なその光がこの世に来られる時、悪や罪にあふれている暗やみに満ちたこの世に来られるその時、この世はこの光に対してふさわしい応答をすることが求められるのです。私たちはこの世に二通りしかない応答のうち、どちらかを選択しなければならないと言うのです。私たちがこれから見るこの二つの選択肢以外に選択肢はありません。両方を同時に選ぶこともできなければ、どちらも選ばせんという選択もありません。私たちには、このまことの光を拒むという選択か、このまことの光を受け入れるという選択か、この二つしかありません。ここにいるひとりひとり、ぜひ自分のこととして考えてください。今、ほかの人のことを頭に思い浮かべている人がいれば、それは置いて、自分のこととして改めて考えてみてください。私たちみんな同じです。気づいていようが、気づいていまいが、私たちは今、心の中であって、この光に対して、このイエス様に対して必ずどちらかの応答をしながら歩んでいます。光であるイエス様をかたくなに拒みながら、御怒りの子として今歩み続けているか、もしくは光であるイエス・キリストを受け入れながら、神の子どもとして歩んでいるかどちらかです。このどちらにも属していない人はこの中にも、この世界の中にもいません。だから大切な質問は、果たして私たちはどちらの応答をしながら今

を歩んでいるかということです。残りの時間はこの二つの応答について、もう少し詳しく見たいと思います。ぜひ自分のこととして考え続けてください。

1) 光に対する拒絶 10-11節

まず、一つ目の応答から考えてみましょう。一つ目の応答として見て取れるのは、光に対する拒絶です。10節はこのように始まっています。「この方はもともとから世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。」と。悲劇的なことがここに記されていました。これまでも学んできたように、イエス・キリストというのは、まさに初めからおられた世界の創造主でした。造られたすべてのもので、この方によらずにできたものは何一つとしてありませんでした。私たち人間もひとりひとり、その目も、耳も、からだのすべてに至るまでこの方によって、この方のために造られました。それにもかかわらず、造られた者は造った方を拒んだのです。造られたその目は、造り主を全く見ようとせず、造られた耳は造り主のことばを全く無視しました。「世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった」のです。ただ勘違いしてほしくないのは、「世はこの方を知らなかった」と言われているのは、これは単なる知識として、知的に知らないという話ではありません。この世はこの方、造り主を個人的な関係を持つ存在として受け入れようとしなかったということです。神様は造られた自然界を通して、ご自身の存在を明らかにし続けているのです。造られた自然界を通して、その存在というものを知識としては知っていたとしても、すべてのものは自分の造り主を認めようとしなければ、その方にへりくだって従おうともしませんでした。造り主が、自分が造ったすべてのものに拒まれました。まことの光であられる御子が拒絶されたのです。

でも、いったいどうしてだと思いませんか？なぜこの世は光を拒むのでしょうか？なぜ人々は、イエス・キリストの福音を、イエス・キリストの真理を忌み嫌うのでしょうか？その答えをみことばははっきりと教えてくれました。ヨハネ3：19-20にこう書いています。「19 そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行いが悪かったからである。20 悪いことをする者は光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。」と。いったいどうしてこの世は光であるイエス様を拒み続けているのか？それは受け入れるために必要な知識が足りていないからではありません。拒むその理由は、ただ人々が光よりもやみを愛しているからでした。人が何よりも自分自身の罪を愛しているからでした。人が自分の愛しているその罪をやめたくない、自分が持ち続けている、愛している罪を手放したくないと思うからこそ、その罪が光によって明るみに出されて、それを責められたり、さばかれることを恐れるのです。自分の罪を愛しているからこそ、それにノーという存在である光から遠ざかろうとするのです。この世は造り主を拒みました。真理に導いてくれる光よりもやみを愛したのです。

でもこの世の罪深さというのはとどまるどころを知らませんでした。続く11節にこんなふうに書いています。「この方はご自分のくににいられたのに、ご自分の民は受け入れなかった。」と。悲しいことにイエス様は幅広く自分の造った世に受け入れられなかっただけではありませんでした。加えて、ご自分の民であったユダヤ人たちからも忌み嫌われ、拒絶されました。本来であれば、ずっと待ち望み続けてきた救世主の誕生を、だれよりも最も喜ぶべき彼らは、イエス様に対して憤りと憎しみを抱き、しまいには十字架につけて殺したのです。どう思います？彼らはこのイエス様に対して、この救世主に対して十分に知識を持っていなかったから、こんな態度をとったのでしょうか？そうではありません。だれよりも旧約に精通していた彼らこそ、このイエス様のうちに数々の預言が成就していることを目の当たりにし続けていました。それでもなお、彼らはこの方を認めようとせず、かたくなに拒絶したのです。彼らも同じでした。自分たちの罪を愛したのです。彼らもまた光ではなくやみを愛しました。やみというのは、確かに光を忌み嫌っているのです。だからこそ光を拒絶するのです。

2) 光に対する受け入れ 12-13節

でもこれで話が終わっていたのではありません。ヨハネは拒絶するという一つの応答と対比して、もう一つの応答も記していました。続く二つ目の応答は、光に対する受け入れです。12-13節、最後にこう記されています。「:12 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。:13 この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。」と。ヨハネはこの箇所を「しかし」で始めていました。明白な対比をここで述べていたのです。今見た、まことの光をかたくなに受け入れようとしない者たちとは対照的に、その名を信じ受け入れた者たちの姿をここに描いていました。そして何よりもそうやってイエス・キリストの御名を信じ受け入れた者にはだれでも「神の子どもとされる特権」が与えられるということ、そのすばらしい約束を明らかにしていたのです。

▶「その名を信じた」

ここで特に注目してほしいことばがあります。それは12節の「すなわち」の後、「その名を信じた人々には」の「その名を信じた」ということばです。これはすごく大切なことでした。なぜなら「その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった」と書いてあるからです。つまりその名を信じていない者には神の子どもとされる特権は与えられないということです。では「その名を信じ」というのはいったいどういう意味でしょう？鍵になるのは二つのことばです。

一つ目は、まずここで「名」ということばがありました。この「その名」の「名」というのは、単なる名前とか肩書きのことを言っているではありません。聖書の中で「名」と言う時、それはその人自身や、その人の性質とか働きなども含めたすべての部分を表すものでした。その人をその人たらしめるものなのです。また、もう一つ「信じ」ということばがあります。これは、何かを真実なものであるとみなして、それに完全に信頼して身をゆだねることを表わすものでした。「名」というのは、その人自身がその人の性質とか働きなども含めたすべての部分のこと、そして「信じ」というのは、何かを真実なものであるとみなして、それに完全に信頼して、自分の身をすべてゆだねることでした。そしてこの二つをくっつけて、これまでの文脈を思い出しながら考えるとするのであれば、ヨハネはここで、「この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々」と言いました。ここで「その名を信じた人々」と言った時、これはイエス様の姿、全部のことを含んでいたのです。イエス様の姿というと、どんなものを見てきました？私たちは1:1-5でいろいろなことを見てきました。まずイエス様は永遠の神様でした。イエス様は世界の造り主、主権者でした。イエス様はいのちの源であり、またイエス様は人の光であるということも見てきました。そのイエス様のすべてのご性質を含めて、それらすべてを心から信じるということが求められていたのです。

そして、これは私たちにとって非常に大切なことでした。なぜかというと、私たちの信仰というのは、私たちが思い描くイエス様を信じることではないからです。私たちの信仰というのは、みことばが明らかにしているイエス様の姿をただそのまま信じて、ただそのお方に私たちの身をすべてゆだねるものだからです。私たちは絶対に自分自身の都合に合わせて、信じたいイエス様の姿をそれぞれ勝手に思い描くではありません。私たちが信じ受け入れる時、この部分はイエス様を受け入れますが、この部分は受け入れませんなどと言うことは絶対にないというわけです。ことばであられるイエス様は、まことの救い主、まことの主、まことの神様、まことの創造主、まことの光でした。そして私たちはそんな偉大な方の前にひとりひとりみずから進んで自分自身のすべてを明け渡そうとするのです。私たちは救いに関して神様と何か交渉するものではありません。私たちはただその方に身をゆだねるだけしかありません。でもそうやって心から御子を信じた者には、「神の子どもとされる特権」を神様ご自身が与えてくださるというすばらしい約束が書かれていたのです。こうやって考える時、果たして私たちはイエス・キリストを今本当に信じ受け入れているのでしょうか？それとも信じ受け入れていると思い込んでいるだけで、イエス

様のうちにあるこの部分は、私は受け入れません、この部分だけ私はもらいますと、イエス様と交渉していないでしょうか？光であるその方を拒み続けていないでしょうか？

12節でそう述べたヨハネは、最後13節をこう締めくくります。「この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである」と。今、私たちは1:1から順番に見ています。そして、ヨハネ1:1-18というのは、このヨハネの福音書のイントロダクションと言われています。導入部分になるのです。それがなぜ大切なのかと言うと、私たちが1-18節の中で見る内容というのは、この後ひたすらに繰り返されています。例えば「光」ということばはこの1章の中にも出てきましたが、これから先何度も何度も出てきます。「あかし」ということばもこの後も何度も何度も出てきます。ヨハネはこのイントロダクション——導入の部分で語ったことについて、後の部分で膨らませていくのです。ですから、この13節に書かれていることは、また今度詳しく見ます。ただ、簡潔にこの部分を使うのであれば、13節を通してヨハネが伝えようとしていたことは、イエス・キリストを信じ受け入れた人たち、神の子どもとされた人たちは、自分たちの力で信じたのではなく、変えられたのではなく、子どもとされたのではなく、ただ神によって生まれたということです。

どういうことか、少しだけ見てみましょう。13節には、「この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく」とあります。三つの否定のことばがここに使われていました。

(1)「血によって」

一つ目にまず「血によってではなく」と書いていました。これは、人というのは血のつながりによって、肉のつながりによって新しく生まれることはないということです。もっと簡潔に言えば、私たちは例えば両親が信仰者だから、子どもが自動的に信仰者になるわけではありません。祖先が信仰者だから、その後続く者たちが自動的に信仰者になるのでもありません。もっと言えば、クリスチャンとして生まれてくる人はだれひとりとしていません。私たちは血のつながりから神の子どもとなる、それができるような者はだれもいないと言うのです。血のつながりは人を新しく生まれ変わらせる力はありませんでした。

(2)「肉の欲求」

次に、こんなことばが続いています。「血によってではなく、肉の欲求」でもなくと。この「肉の欲求」というのは、その人自身の願い、情熱のことです。つまり、生まれながらの人間が抱いている願いや情熱が人を新しく生まれさせるということは絶対にないと言うのです。人がどれだけ神様に近づきたいと強く願っていたとしても、肉の欲求を通して神の子どもとなることができる者はひとりとしていないということです。人の情熱が神の子どもとなることをその人にもたらずわけではありません。

(3)「人の意欲」

そして最後に、「肉の欲求や人の意欲によってでもなく」と書いていました。この「人の意欲」というのは、その人自身の意志の強さ、努力のことです。でも、これも同じです。罪の中に死んでいる者たちは、どんなに神様の前に必死に努力したとしても、どんなに良い行いを積み重ねたとしても、それによって新しく生まれることは決してないと言うのです。

人々は血によってでも、肉の欲求によってでも、人の意欲によってでもイエス・キリストを信じ、新しく生まれ変わることはできませんでした。ではいったい何を通して、人は新しく生まれ変わるのでしょうか？ヨハネは、その答えを13節の最後でこう言うのです。「ただ、神によって生まれたのである」と。救いを成し遂げられたのは最初から最後まで神様だということです。私たちにできたことは何一つとしてないということです。この世に現れたまことの光、そのお方はただひとりでした。このお方がいのちであるからこそ、この御子だけが死んだ者たちにいのちを与えることができました。光り輝いておられる御子だけが、やみの中にいる罪人を照らして、真理を教え、救いへと導くことができました。暗やみの中、死んでいた私たちにできたことは何もありません。ただ、神様の恵みによって、キリストを信じる信仰を通して、私たちは救われ、新しくされるのだと言うのです。

そして、これが私たちにとって最高の事実であるからこそ、私たちのうちに誇ることができるものは一つとしてありませんでした。エペソ2：8に「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。」とあります。自分自身から出たものは何もありませんでした。ただ、神からの賜物だったのです。行いによるものではありませんでした。だからこそ、私たちはだれも誇ることはできないのです。まことの光であられる、そのお方は現れました。私たちを暗やみから救い出してくださるために、この地上に来てくださいました。そしてこの方が私たちの代わりに十字架にかかって死んでくださいました。この方こそ、あわれみ深いお方、恵み深いお方、愛に富んだまことの光であるイエス・キリストだったわけです。そのすばらしい光がこの地上に来てくださいました。だとすると、私たちに問われるのは、このお方に対してどのように応答するのかということです。そして、その応答の方法は二つしかありません。そのまことの光を拒むのか、それともまことの光を受け入れるのかです。自分のこととして改めてよく考えてみてください。